第6章　張赫宙文学と近代の挫折

1　はじめに

張赫宙文学には朝鮮社会の前近代的な諸相を批判的な視線で捉えた作品が多い。しかも、それらの批判的な視線は、朝鮮文学によく見られるような啓蒙的な側面からくる一つの方法論的なものではなく、その封建性自体への強烈な嫌悪感を伴うものとしてあらわれている。このような朝鮮の前近代的な諸相への嫌悪は、張赫宙文学に一貫するものとして、さまざまな作品の中でその片鱗を見せ、またそれ自体が作品の中心的な主題にもなっている。張赫宙文学におけるこのような前近代への嫌悪は、当然のようにその対立概念であるもう一つの軸を想定する。いわゆる近代である。前近代への批判が直ちに近代を意味するものではないが、少なくとも近代への方向に収斂するものと言わざるを得ない。つまり、彼が持つ前近代的な朝鮮への批判は、結局のところ近代という方向性を自ずから内在しているといえる。しかし、張赫宙文学においての前近代と近代を論じる時には、日本近代文学とは違う朝鮮の特殊な立場を考慮しなければならない。それは以下論じる朝鮮文学が宿命的に持っている反近代という一面である。朝鮮文学のこのような特殊な立場に対する考察を無視して、張赫宙文学をただの日本近代文学の常識の中で論じるのは、この特殊な朝鮮人作家像を大きく誤らせる可能性がある。

従来の数少ない張赫宙論やそれに類似する朝鮮作家の日本語文学研究は、おもに親日文学や国策文学への関与、あるいはその逆の抵抗文学との比較の側面において強調されてきた感がある。その代わり、近代朝鮮文学が持つ本質的な面を視野に入れての考察はあまりなされていなかったと言える。つまり、親日か反日か、あるいは外来主義か民族主義かの影に隠され、そのような結果を導く大きな前提としての近代や反近代の側面は、日本での朝鮮文学研究だけではなく、当の韓国文学においてさえもほとんど論じられることがなかったのである。とくに日本と関わる植民地文学研究においては、林鐘国の『親日文学論』の影が大きく、それによる見方が以後の韓国の文学研究で長く定説化されてきた感がある(1)。一方、日本の朝鮮文学研究においても、植民地支配の加害者という負い目から、それに反する独自の見解が展開しにくく、自然に韓国での論を踏まえるかたちで慎重に展開せざるを得なかったのが現状である。本稿では、このような従来の見解とは立場を異にして、張赫宙文学が持つ前近代への批判と嫌悪を分析することによって、張赫宙文学が目指そうとした近代への方向性を探ってみることを目的とする。その展開の中でいわゆる親日文学が持つ諸問題も明らかになると思われる。まず、その予備的な考察として朝鮮文学が持つ反近代性、あるいは前近代への郷愁につ

いて簡略ながら検討を試みよう。

2　近代と反近代

まず、やや通俗的な文化論から始めよう。朝鮮の近代文学は日本近代文学の強い影響の中で発生し、形成されてきたというのは周知の事実である。とくにその発生と形成の時期が日本による開化と植民地時代とに重なるためにその影響関係は甚大なものである。そうした影響関係は、戦後を経て急激に薄くなってはいるが、現に今まで続いているのが現状である。とすれば、朝鮮近代文学の胎動から形成期を経て甚大な影響を及ぼし、今まで続いている日本近代文学からの影響は、朝鮮近代文学に一体どのような具体的なものを残しているのであろうか。抽象的な思想や文芸思潮の問題などは捨象して、具体的な作品としてかの地の幅広い層に記憶される日本近代文学はどのようなものがあるだろうか。しかし、この質問にはほとんどの韓国人がその答えに躊躇するであろう。かの地では日本近代文学の頂点をなす夏目漱石や森鴎外、さらに芥川龍之介や谷崎潤一郎などの作品でさえほとんど知られていないからである。それでは開化期から植民地の長い間にかけて甚大な影響をおよぼした日本近代文学がかの地で幅広い層に受け入れられる作品を一つも残していないかというと、必ずしもそうではない。それらしい作品がたった一篇あるからである。しかし、それに答える前に質問の角度をさらに通俗的な方向にかえてみよう。いま韓国の年末のテレビ番組の中で、日本の忠臣蔵や西鶴の心中物に当たるようなものがあるかという質問を設定してみよう。多くの答が「春香伝」などの古典劇を揚げるであろう。しかし、その中で意外に多くの答が「李守一と沈順愛」を揚げることも発見できるであろう。『長恨夢』の原題の作品は、一般的に「李守一と沈順愛」という名前で広く人気を博しているが(2)、いかにも中国風の題名に反し、その出自は日本近代文学にあるのである。それは、意外にも尾崎紅葉の『金色夜叉』の翻案小説なのである。そしてこの『金色夜叉』こそ韓国の民衆に受け入れられ、愛され、ほとんど血肉化されるかたちで根を下ろすことになった唯一の日本近代文学なのである。とすれば、なぜ尾崎紅葉の、しかも『金色夜叉』なのかが問題である。この作品の持つどのようなところが、かの地でそこまで受け入れられることになったのだろうか。

翻案小説『長恨夢』は、その基本的な筋においては、原作の『金色夜叉』とほぼ一致している。しかし、登場人物の名前や時代背景、さらに小説の舞台においては、翻案小説が一般的にそうであるように、朝鮮風に変えられている。簡単にその登場人物の名前を見ると、間貫一が李守一、お宮が沈順愛（沈殉愛と同音）、富山重平が金重培（金重拝と同音）というふうに、いかにも巧妙に設定されてい

る。間貫一や李守一（朝鮮は李氏王朝である）、お宮と沈順愛といういかにも旧秩序を代弁するかのような名前と富山重平や金重培という新しい拝金主義（あるいは近代資本主義）を標榜する名前の対立も全く同じ構造である。このような同じ構造で話は展開するが、その内容は周知の通りである。没落した旧士族出身の学生である間貫一（李守一は没落両班）が、同じく没落した士族出身で旧来の道徳に忠実したお宮（沈順愛）と恋をするが、それが平民出身の新興ブルジョアである富山重平（金重培）の干渉で失敗し、お宮（沈順愛）は籠絡された後に捨てられ、間貫一（李守一）は学問を辞め最終的に高利貸しとなってそれに復讐する話である。新と旧、近代と反近代の対立構造が明確な作品である。間貫一（李守一）は大学の法科部に在籍し、外面的には一応の近代の担い手ではあるが、実質的には前近代的な道徳に徹する旧時代を代表する人物である。一方、富山重平（金重培）は曲がりなりにも近代的なシステムをになう金融業者で、俗悪ながらも近代的な倫理を標榜する人物である。しかし、作品では最終的には間貫一（李守一）が復讐を遂げるかたちで勝利し、新興ブルジョアの富山重平（金重培）が敗退し没落していく。封建的な高利貸しが、近代的な金融業者に勝利するという構造なのである。つまり、前近代の勝利である。この点、『金色夜叉』（あるいは『長恨夢』）は非常に反近代性の強い作品で、近代文学が目指す方向からすれば大きな反動と言わざるを得ない。それは尾崎紅葉が率いた硯友社がそうであり、また彼らが標榜する擬古体というものも言文一致からの反動であったのである。この反動性が当時に日本で人気を博した理由でもあり、またそれが韓国近代文学の中でこの作品が唯一定着できた大きな理由なのである。

しかし、『長恨夢』はその原作の『金色夜叉』が持たないもう一つの人物像を持っている。それは金融業者の新興ブルジョアである金重培像が、小説でも劇でも、ほとんど日本人のイメージで描かれていることである。俗悪な近代的な人物の象徴である金重培こそ、近代日本を象徴する人物である。それに対して李守一は王朝以来の封建主義を頑なに守り、日本がもたらした近代によって滅びていく士族（両班）を代表する人物である。となると、ただの新と旧、前近代と近代の対立だけではなくなるのである。日本という軸が近代の中に大きく介在することによって、近代的なものこそ日本的なものであり、日本的なものこそ近代的なものという構造が生まれてしまう。新と旧、前近代と近代の対立であったはずのものが、その本来の意味を全く失い、朝鮮的なものと日本的なものに変質しまうのである。そして、反日的な時代層と風土の中で、日本的なものである近代は当然排除されなければならなくなる。ここで反近代の論理が誕生するのである。つまり、近代と日本という等式が、その裏返しとして反日と反近代の等式をうみだしてしまうのである。その代わり、朝鮮的な秩序を守るという論理はそのまま前近

代への方向に走らざるを得ない。韓国で『金色夜叉』の翻案小説『長恨夢』が幅広い人気を博しているのは、まさにこの反近代の構造をよく代弁しているからである。そして、このような反近代的な指向は韓国近代文学が持つ宿命的な問題でもあるのである。ここで、朝鮮末期の開化期に民間ではやった民謡を一つ紹介しよう。「洛東江七百里、コンクリート橋桁かけて、ハイカラごろつきが入ってくる」という民謡がある(3)。この歌謡は洛東江からコンクリート橋桁をかけて入ってくるハイカラごろつきを警戒しようという意味の内容である。洛東江は釜山を河口にする朝鮮の代表的な河川で、そこから近代の象徴としてのコンクリート橋桁をかけて入ってくる「ハイカラごろつき」とは、いうまでもなく近代日本であろう。日本による近代化への強い警戒心を露骨に表したもので、その方向は反近代を目指している。このような反近代の指向と前近代への郷愁は朝鮮近代文学全般に渡っており、張赫宙と同時代の代表的な作家である金東里の「巫女図」(4)、兪鎮午の「滄浪亭記」(5)や日本語小説「南谷先生」(6)などの代表作からも簡単に確認することができる。しかし、膨大な韓国近代文学のなかで、すべての作品が反近代と前近代への郷愁を持っていることは当然有り得ない。いくつかの例外として近代を目指した作品も当然有り得るが、その例が極めて少なく、またそれを描く作家が後にいわゆる親日文学の方に傾斜していく傾向があることだけは指摘できると思われる。近代的なものが日本的なものであるということから、その日本に対抗するかたちで民族主義的なものを打ち出すしかなく、その民族主義的なものは、当然反日本的なものであり、それが結果として反近代の側面を帯びてしまうのである。それを逆に言えば、近代的なものの主張は、親日的なものとして反民族的なものになり兼ねないところが最初からあったのである。そのため、東京留学帰りの両班の子弟によって形成され、強い民族主義を主体とする韓国近代文学が、反近代の色彩を強く示すということは、ある意味では当然の結果とも言える。そのため、日本近代文学の影響を受け成立した韓国近代文学は、少なくともその内容だけで言えば、近代文学が目指す方向とは正反対の方に走るという自己矛盾を最初から内包し、現にそのような傾向を強くあらわすことになったのである。

このような韓国文学の構造に対する認識のうえで、以下、張赫宙文学に現れた前近代への嫌悪と批判の姿勢を「仁王洞時代」とその続編である『孤独なる魂』を中心に考察してみよう。

3　「仁王洞時代」と前近代の終焉

「仁王洞時代」は雑誌『児童』に連載された後、一九三五年六月、作品集『仁

王洞時代』に所収された張赫宙の最初の長編小説である。作品の末尾には、「長編の第一部」として「一九三四・三」月に完成されたという作者の添え書きがあり、この作品が長編の一部として書かれたものであることが示されている。それらの事情は、作品集の序をなす「作者の言葉」の中からも具体的に見ることができる(7)。

私の想華だけで出来たものは「十六夜に」「一日」「仁王洞時代」であつた。「仁王洞時代」は全篇完結の時、初めて作者の計画がはつきりするであらう。本集にのせたのは雑誌「児童」に連載した分だけだが、これだけでもむろん、読物としてまとまつてゐると思ふ。私は既にこの「仁王洞時代」の続稿を持つてゐるが、それは徐々に書き直され、数年後に一巻にまとまる性質のものである。それはジャーナリズムと稍々縁遠い小説だと思ふからである。

この序文から見るかぎり、「仁王洞時代」はそれ自体でじゅうぶんまとまった長編小説であるが、張赫宙はこの時点ですでに続稿を持ち、「徐々に書き直」し、数年後に「一巻」として纏める計画を持っていたことがわかる。また、それが「ジャーナリズムと稍々縁遠い小説」というところから、作者がこの作品にかける特別な意気込みを感じさせる。それは文壇的な要求や思潮を越えて、彼がいちばん書きたいものであったということを示すものであろう。その予言通り、この作品は、後の一九四二年二月『孤独なる魂』として改訂増補されることで、この作品のテーマに対する彼の執着をそのまま証明することになる。それだけではなく、この作品で最初に示されることになる彼自身の幼年体験、もしくは自伝に基づいた話の展開は、「仁王洞時代」以後のほとんどの作品に影響している。張赫宙は彼自身の幼年体験を実にさまざまな作品で、しかも執拗なまでに繰り返し描いていて、それ自体が張赫宙文学の大きな特徴でもあるが、それらの原型をなす出発の作品が「仁王洞時代」なのである。それでは、「仁王洞時代」に至るまでの張赫宙文学の展開とそれ以降の過程を簡単に見てみよう。

張赫宙が朝鮮人としては初めて日本文壇に登場したのは、一九三二年改造社の懸賞佳作「餓鬼道」においてである。朝鮮農民が窮状に堪えかねて蜂起に至る過程を描いた当選作「餓鬼道」をきっかけに、彼は立て続けに「迫田農場」「追はれる人々」「奮ひ起つ者」「少年」「山霊」「アン・ヘエラ」などの一連の朝鮮農民の惨状を告発する作品を次々と発表する。ほかにも、「墓参に行く男」「狂女点描」「或る時期の女性」「憂愁人生」などの社会批判性の強い、いわゆる「同伴者文学」系列の作品を続々と発表し、日本のプロレタリア系文学評論家たちから今後の期待を込められた高い評価と注目を受けている。また彼自身も出発

当初からそのような態度で臨んで、日本語での創作目的を、

朝鮮の民族ほど悲惨な民族は世界にも少いでせう。私はこの実状をどうかして世界に訴へたい。それには朝鮮語では範囲が狭小である。その点、外国語に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思ひました。(8)

というなど、強い意気込みを持っていたのである。しかし、このような社会批判の作品が依然として続くなかで、第二創作集『仁王洞時代』が編まれることになるが、そこには今までとはやや系統の違う作品が載せられることになる。今までの農民蜂起や植民地批判の強い、多分にプロレタリア文学の影響による作品は影をひそめ、その代わり朝鮮社会の内部の様々な葛藤と矛盾を現した作品が主を占めることになるのである。「十六夜に」「葬式の夜の出来事」「愚劣漢」「仁王洞時代」などがそれである。なかでもとくに異彩を放ったのが、それまでの写実風の客観描写から離れ、幼年体験を日本の私小説風に書いた長編小説「仁王洞時代」と言える。そして、この「仁王洞時代」から始まった張赫宙の自伝的な素材は、以後の作品にさまざまなかたちで繰り返えされていくが、それがもっとも顕著なのが、「愛怨の園」、「人間の絆」「美しき抑制」「緑の北国」などの「人間の絆」三部作、そして「仁王洞時代」の改稿作「孤独なる魂」などの長編小説である。ほかにも、一見それとは違う作品の中にも、彼の幼年体験が部分的な断片となって入っており、張赫宙文学の中心的な素材は「仁王洞時代」から始まっているように思われる。それでは「仁王洞時代」の概要を見てみよう。

「仁王洞時代」は主人公の「私」(金龍栄)が幼年時に仁王洞で暮らした話を大人になってから回想するかたちになっている。「私」は実母と離れ、父と嫡母(義母)が祖父を中心に住んでいる仁王洞の宗家に引き取られていた。その仁王洞の実家は南朝鮮有数の豪族(両班)で、併合直後の祖父の代までは政府の地方官も直接統治できないほどの近辺一帯における「絶対の支配者」だった。しかし、「私」は父の妾である市場の飲屋の女から生まれた庶子だったので、子のない父の嫡孫扱いになるはずであったが、周りからの差別は絶えない。祖父はそのような「私」を可愛がり、また「私」が利発で、叔父の子仁栄の出来がよくなかっただけに、「私」を仁王洞金氏の嫡孫にしたいと日頃思っていた。それがさらに周りの反発を買い「私」は叔父たちをはじめ嫡母にも冷たくされ、仁栄にはいつもいじめられる。日頃「私」に冷たい父親は女道楽でいつも家にいない。「私」はそのさびしさを未婚でやさしい末の叔母や小作農民である平民の玉女兄弟との交流にまぎらせていたが、平民と付き合ったことで「私」はひどく軽蔑され、玉女

の父親も厳しく懲らしめられる。そんなある日、玉女のところへ実母が忍んできて、「私」に仁王洞から出ていこうと誘うが、「私」は母の姿に失望してそれには応じない。そして、やさしい末の叔母も結婚してしまったある日、父が久しぶりに家に帰って無礼な平民を懲罰するといって、幼い「私」に同行を命じる。その平民が身分不相応の大きい家を建てたというのが無礼の理由であるが、それを言い訳にリンチを加え、平民の財産を巻き上げるのが本心であった。父の一行がその農民の住む村に押し込んだときには、その農民の一族はみんな逃げた後で、とりあえず遠戚にあたる年寄りの病人を縛って馬に引きずり帰り家の牢に押し込んでおく。一族のものを牢に押し込んでおけば、後で本人の常民が財産をもって謝りに来るという心算があったのである。しかし、本人は現れず、途中で骨が折れ血だらけになった老人は死んでしまう。そして数日後、父親は金州の日本の憲兵隊から召還状をもらう。憲兵隊の存在をよく知らない一族は狼狽し、最終的には憲兵隊の召還状を無視して、両班としての恥をかくより自決を考える。そして、いよいよ仁王洞に憲兵隊が現れることになるが、通訳と二人で来た憲兵分隊長は意外に穏やかな人で、一家のものは、「人民の統治は政府」にあることと「今後はそのやうなことがないやう」懇ろに説かれることで、一応事件は決着する。その後、祖父はこの事件の心労で病みつき死ぬ。そして、ますます居づらくなった「私」は、母がまた彼を迎えにきた時に、ついに決心して夜中密かに仁王洞から出ていくのである。

以上、概要から見るように、「仁王洞時代」は「私」が幼年期に住んでいた仁王洞から決別するまでの話である。その仁王洞は旧い朝鮮がそのまま残存している閉塞した村で、その中で「私」は様々な封建制度の犠牲になって苦しみ、ついにその前近代的な世界と決別して村を出てしまうのである。仁王洞という閉塞した空間というのは、そのまま封建朝鮮の一つの小宇宙を象徴するものでもあろう。その点、仁王洞という前近代的な空間とその時代の終焉は、この作品が持つ重要な意味をなすと言えよう。その通り、作品全体には、その仁王洞で「私」が目撃することになる様々な封建朝鮮の旧弊が克明に描かれて、そのまま前近代に対する作者の嫌悪感と批判精神を現しているかのように思われる。そして、そのような前近代に対する批判と嫌悪こそ、張赫宙文学の大きな特徴といえるものである。以下、その前近代への嫌悪と批判のところを作品中から見てみよう。まず、冒頭部分の仁王洞時代への回想にいたる「私」の心境である。

私はなるだけ回想だとか追憶だとか言ふ風なことなしないことにしてゐる。過去をふりかへることは私には確に一つの大きな苦痛であるやうだ。

私がもし私の幼年時代のことをふと憶ひ出したとする。すると私は直ちに暗

がりと魔されるやうな圧迫感とに、胸は狭心症にかかつたかのやうに苦しくなり、いつ果つやも知れんやうな嗚咽が咽喉へこみ上つて来て、私の眼には悲劇俳優のやうに涙滴が湧き上り頬を濡すのだ。これは多分四十になつても五十に老けても已みさうにはない。

このように、主人公の「私」は過去の回想や追憶に快い郷愁などは決して持っていない。郷愁心どころか、それは「魔されるやうな圧迫感」と胸の「狭心症」と「涙滴」をともなう「大きな苦痛」なので、できるだけ過去の回想や追憶などは「しないことにしてゐる」という。過去に対する自らの決別と拒否である。その仁王洞時代の記憶に対する「私」の拒絶は、仁王洞時代に代表される前近代的なものに対する拒否感とつながるものであろう。また、その仁王洞は「私」の故郷でもあることから、それに対する拒否感はさらに旧い前近代的層としての故郷の否定にもつながるといえる。このように、「仁王洞時代」の冒頭部分は、作者の分身でもある「私」に内在する前近代層との強い断絶意識を前提として出発している。そしてこのような断絶意識は、その対極の継承の問題と合わせて極めて重要な意味を持つ。この問題は伝統断絶か伝統継承かのいわゆる植民地歴史観と民族主義的な歴史観にも収斂し、それが文学に投射されるかたちで、いわゆる親日文学と民族文学の問題にまでつながっているからである。アジアの近代はその出発において、反封建主義もしくは前近代からの断絶をその性格の一つとして内在している。とすると、近代というのは結局のところ、旧い伝統的な層からの決別と断絶の方向を目指さざるをえない。つまり、伝統断絶の方向である。その逆のケースが伝統継承で、それは伝統と称される前近代的なものを引きずることになり、近代的な性格とは相矛盾する反近代の方向になってしまう。そして、この伝統継承と伝統断絶に対比される近代と反近代の対立構造は、さらに植民地歴史観と民族主義歴史観にそのまま投影される。植民地にとっての近代は過去に対する断絶を意味し、それに対抗する民族主義歴史観というのは、当然のように伝統継承という民族の主体性を確保しなければならなくなる。しかし、その伝統継承という主体性こそ反近代になってしまうのである。植民地において伝統継承がしばしば反近代の性格を強くもつのはこのような構造からであろう。その意味において、「仁王洞時代」の冒頭でみる過去への断絶意識は張赫宙文学の方向と姿勢を自ずから示すものであろう。そして、その通り、作品では封建朝鮮に対する激しい批判がなされている。その最も顕著なところが両班制度という伝統的な家族制度による、嫡子と庶子、両班と常民の厳格な身分差別である。そのような厳格な身分制度のなかで「私」は両班の庶子として産まれ、さまざまな辛酸を味わうことになる。

この祖父の家は―つまり私の幼年時代の時は、仁王洞金氏の宗家で、金州郡一帯だけではなく南朝鮮にも有数の豪族の一つであつた。今でこそ、多くの貴族と同様にその豪壮な建築は朽ち果て、領地も人手にわたつてしまつたのではあるが、私の少年時代までも豪族としての体面をよく保つて居り、直属の常民や小作人だけでも十数ヶ洞里に渡り、政府の派遣した地方官も直接にはこれらの村々の統治は出来なかつたし、祖父の手を通じて行政されてゐたのだが、祖父は旧韓国時代は無論、併合直後、まだ憲兵時代だつた頃までも、村民の絶対の支配者だつたのだつた。

祖父は「南朝鮮にも有数」の両班であり、その子孫である「私」も当然そのような両班として待遇されるはずであるが、実際にはそのようにはならない。「私」が庶子の出であるからである。両班制度はその封建的論理として嫡子と庶子の血統を厳密に区別し、それによる差別がとくに厳しく、それ自体が王朝時代の大きな社会問題でもあったが、このような封建制度のなかで、「私」はさらに軽蔑される酒屋の女を母とした庶子出だったのである。しかし、「私」が庶子出だということは非常に重要な意味を持つ。というのは、「私」は封建制度の嫡子ではないということを意味するからである。当然のように、封建制度の遺風をそのまま継ぐ必要は最初から持たない。ましてや、「私」はいびつな封建制度の陰ともいうべき庶子生まれなのである。封建制度とは大きな重荷として遺棄されるべきものでこそあれ、とても継承するようなものではなかったのである。「私」が庶子出だということは、「私」が仁王洞に象徴される旧い前近代的な秩序の担い手ではなく、それとは決別した新しい秩序の担い手であることを自ずから示しているものと言える。さらに、これは近代の構造をそのまま反映しているかのように見える。近代、あるいは近代文学の担い手は封建主義の伝統を継ぐ陽の部分としての嫡子たちによってではなく、時代の陰の部分である庶子のような人たちによってなされてきたからである(9)。その点、作品の「私」が張赫宙自身と重なることで張赫宙文学の本質にも深く関わっていると言える。とりあえず、作品での「私」は庶子ということで、仁王洞生活の中でさまざまな差別に直面する。その差別から「私」はますます怖気づいて、祖父のお使いで内房に行った時などは、女の人たちの剣幕に押されてものが言えなくなる。すると、すぐさま、

「産まれの賤しい児はほんとに仕様のないものだよ」従母が小声で傍の婦達に囁くのがきこえた。

「いくら教へたつて直るこつちやないからね」

「そらさうともさ。母が遊女ではね」
「遊女も遊女。市場の酒売りだもの。酒売りの婦で淫売でないものはゐないからね」

と家族の皆から露骨に軽蔑される。そのような「私」を祖父だけは可愛がり嫡孫にしたいと思っていたが、それも周りの反発からできなくなる。祖父が「私」を嫡孫にしたいと周りの両班に言い出した時には、両班たちは「それはとんでもないことです。庶子に家をつがすなんて」と冷ややかな態度で反発する。

「さうかといつて、他に子供はいないではないか。」
「そんな不合理なことを。あなたにも似合ぬことを言はれますのぢや。古来、庶子なるものは、例へどんなに傑れてゐやうと、両班になるどころか、常民と全く変らぬ存在ですし・・・・・・」
「そらア知つとる」祖父は荒々しくいひ放つた。「ぢやが、龍栄は庶子は庶子でも、わしはちやんと嫡孫といふことに入籍しとるんぢや」
「入籍が何になります？」猿顔の老人もまけてゐなかつた。「庶子はどこまでも庶子です。ぢや、あなたは自ら常民におなりになるといひますのですな。ア、ハハハ」
「そうですよ。何を好んで常民に・・・・・・・ハハハ」

戸籍とは関係なく、庶子は常民と同じく最初から両班になれないという徹底した血筋の論理である。このような両班制度の因習によって「私」は仁王洞金氏の嫡孫としては認められず、一家の中ではほとんど常民扱いにされる。しかしだからといって、常民として振る舞うことも出来ない。一家の中で孤立した「私」が近所の平民出である玉女のところに遊びに行き、そこで実母にも会うが、それが家族にばれた時には、「産まれの賤しいものは仕様がないさ」と母から罵られ、祖父と父からも酷い折檻を受けることになる。一応の両班の身分の者が身分の低い常民や卑しい実母と交際したからである。このように、庶子出という「私」の身分は、封建家族制度のなかで最も犠牲を強いられた時代の陰の部分であったのである。そのことから、「私」は最初から仁王洞という旧時代を捨て、新しい近代に向かう土壌を備えもって産まれたといえる。それは「私」の等身大である張赫宙文学の土壌でもあり、方向でもあるのである。

一方、作品では封建家族制度の問題だけではなく、両班たちの腐敗と凶暴さが細かく描かれている。「私」の仁王洞生活のなかで唯一楽しい記憶の対象になり、「私」に愛情を示してくれた唯一の人である祖父でさえ両班制度のなかでは凶暴

で腐敗した両班として批判的に描かれている。「私」が玉女の家で実母と会っていたことに激怒した祖父は、すぐ奴隷を出して玉女の父を引き立ててきて、リンチを加えようとする。常民の生殺与奪権を両班たちは専横的に持っていたのである。そしてこの専横的な権限を利用して、あらぬ罪状を並べ立てながらリンチを加えた後、多額の罰金を取らせるのが成りゆきだったのである。両班の地位と財産はこのようにして築かれたものである。祖父の両班としての専横ぶりを目撃した「私」は「祖父達の財産は大部分そのやうにして集めたもの」と両班としての祖父の本質も見抜くのである。またこの事件に際する仁王洞の家族たちの態度は、その両班体制がいかに極悪で腐敗していたかをよく窺わせる。

玉女の父の苦刑の景をたのしまうと女達は喜ばしげに囁くのがきこえた。彼女等の安逸な生活は時偶この種の事件によつて慰め刺激を求めてゐた。

「来たぞ。来たぞ。」

「ぶち殺してやれ。」

「常奴やーいサングノム」

子供達は騒ぎ出した。

玉女の父は後手に縛られて追ひ込まれた。私は彼の困惑しきつた顔をちらとみた瞬間、祖父や叔父を極悪な人間のやうに感じた。

家族の皆は常民へのリンチに期待を膨らませるが、「私」はそのような横暴なことをする祖父と叔父を「極悪な人間」として捉える。その後、日頃両班を尊重し忠誠を尽くしていたことで特別に許されるが、このような横暴なことをするから周りの常民からの怨声は絶えない。現にこの事件に憤激した玉女の母は、「両班の畜生。子孫の末々まで滅びやがれ」と罵る。このように、両班である仁王洞の実家は、周りの常民の上に暴君のように君臨し、ほとんど略奪同様の手段でその財産を築いてきたのである。完全に腐敗しきった封建朝鮮の一断面でその象徴としての仁王洞一家だったのである。そして、さらにそれを証明するかのような「極悪」な事件が父親によって引き起こされる。それは生意気な常民を懲罰することであったが、その生意気な理由というのは「財貨を貯め、家を徒らに大きく立て直して」いたというまことに理不尽なものであった。しかし、それはあくまでも口実に過ぎず、本来の目的はそれを口実にリンチを加え「罰金でも数百両巻き上げ」るという旧来からの常套的な略奪が真の狙いだったのである。結局この事件によって仁王洞の実家は衰退の道を辿っていくことになる。常民の親戚を人質にとって残虐に殺したことで日本の憲兵隊から召還されたのである。時代は大きく変わり、今までのように両班が専横する旧い時代は終わっていたのである。

それに取って代わって、新しい勢力は新政府というかたちで、統治権と人民という概念をもって、「罫の入つた見なれない紙切」の召還状と日本の憲兵隊という物理力を背景にして仁王洞に押し寄せてきたのである。役所から「罫の入つた見なれない紙切」の召還状をもらった時に父は、「何ぢやこれは。両班を何と見てゐるのぢや。こんな無礼なことが又とあるか」と言って召還状をずたずたにちぎり強気を張っていたが、一家の不安は募るばかりである。

「憲兵隊といふのは何をするところぢや」

祖父は心配さうに叔父や父をみ回した。祖父は叔父に説明されると、うーんと苦しさうに唸つた。私には祖父の白く血の気の失せた顔が、愕きの為によけいに長くなつたやうにみえ、凛々しかつた眼の色まで白味を帯びて来たやうに思はれた。祖父だけではなく、叔父を始め家族の者は憂ひに沈んだ。ただ父だけは豪気を装ひ、何のこともないといふ風に喋りちらしてゐたが、私は彼の眼の色にも不安の色がぼーときざしてゐるのを見逃さなかつた。私は大人達に新政府の偉力をそれとなくきいてゐた。この山々の一隅に挟まつてゐる仁王洞と、やがて攻めてくるであらう役人達との戦ひのことを空想してみたが、父の空虚な威力だけでは、とても勝てさうに思はれなかつた。

これに村の人たちは「数百年間、事実に於いて彼等の王であつた吾が一家も今は最後が来た」と噂し、「両班も亡ぶ時があつたかな」と罵りさえする。そして、いよいよ憲兵がきて、祖父と父は恥をかくより自決の覚悟で憲兵分隊長と対面することになったが、幸いに「人民の統治権は政府にうつつた」ことを懇ろに説かれ、父がそれに了解することで事件は無事に終わる。しかし、この事件をきっかけに仁王洞一家の旧来の地位はほとんど失われ、それが新しい勢力に取って代わる。その新しい勢力が日本によって持たらされる近代的なシステムである。それは両班による専横的な統治ではなく政府の法律と役人による統治、暴虐な殺人ではなく召還状という法律的な手続きに称される新しい性格のもので、そのようなシステムを支え推進させる物理力としての憲兵隊の登場である。この新しい勢力の登場によって仁王洞に象徴される旧い封建朝鮮は崩壊するのである。

一方、この事件をきっかけにして「私」は、憲兵隊という新しい勢力によって旧悪の仁王洞一家が滅ぶのを密かに望むような態度を取る。それで従兄弟の仁栄からは「お前は憲兵隊の味方だな」と厳しく詰め寄られたりするが、心情的には仁王洞の旧悪より日本の憲兵に好奇心を持ち密かに傾斜していくのである。誰もが恐怖を感じて近寄らない憲兵に「私」が最初に接近したのも、このような心情の現れであろう。そして、なによりもその憲兵から「私」は今までは経験したこ

とのない文明の臭いを初体験することになる。

彼等の大きな体、固い服装、黄色い襟かざり、見慣れない帽子など、私の近くへ来た彼等から発散する臭ひは全く異様なもので鼻をぷんとついた。それは私の接した最初の近代文明の臭ひであつたのだ。隊長は私の頭を撫でて微笑みながら、何かと言ひかけた。私は彼の手が私の体に触る瞬間ぞくつとしたが、頭を撫でられると、寧ろ快く感じられた。

憲兵から初体験した近代文明の臭いは「全く異様なもの」ではあったが、すぐ「私」はそれに「寧ろ快く感じられる」ようになる。憲兵は近代文明の象徴として現れており、それに対する「私」の親近感は、そのまま近代文明への親近感につながるものであろう。そして、その近代の象徴である憲兵の登場によって仁王洞一家の旧悪は一掃され、「私」を取りまいている前近代的な世界も終焉していくのである。それを現すかのように、この事件の心労から祖父が病死し、仁王洞一家が凋落していくなかで、「私」も母に連れられて仁王洞を逃げしてしまうのである。

私は闇の中に見える両側の山岳の奇異な形が悪魔のやうにも、猛獣のやうにもみえたりして恐しかつた。私の行くさきの町はどんなところだらう。母の家はどうだらうか、などと考へてゐるうちに、私は馬夫の背中で寝入つてしまつたのだつた。

仁王洞を密かに夜逃げする「私」が見た最後の象徴的な場面である。仁王洞を取り囲む山が「闇の中」で、「奇異な形」をして、あたかも「悪魔にも、猛獣のやうにも」見えて「恐ろし」かったというのは、その向こう側に横たわっている仁王洞に象徴される封建朝鮮をさしているようにも思われる。近代文明が押し寄せるなかで、仁王洞は未だに「闇の中」で、新しい時代に遅れた「奇異な形」をして、「悪魔にも、猛獣にも」見える「恐ろし」い旧弊を引きずっているといえる。「私」はそのような仁王洞を捨てて、母の住む未知の都会の町を目指したのである。その都会の町というのは、閉鎖された封建的な空間である仁王洞とは違って、新しい近代的な空間であることは言うまでもない。そして「私」はこれから経験することになる近代的な新しい空間への期待と不安に満ちた好奇心で仁王洞を後にするが、その近代という空間がどのようなものであるかは、まだ「私」にはわからない。しかし、確かなことは、もう「私」には仁王洞に後戻りは出来なくなったことである。ちょうどそのように、張赫宙文学は仁王洞という前近代

との断絶によって出発し、新しい近代的な空間を目指して後戻りできない勢いでまっしぐらにつき進んだのである。封建朝鮮への記憶と郷愁を断ち、近代という未知の世界に不安な希望を抱きながら、その新しい時代のなかで生きる道を模索していったのである。それは彼自身の生きる道でもありまた朝鮮民族の生きる道でもある。しかし、そのような近代への方向がどのようなものであり、どのようなかたちで彼を待っていたかは植民地の歴史が雄弁に語り、また今日の彼に対する評価がさらなる傍証として残っているが、それはすでに朝鮮近代の出発から胚胎されたものである。そして、そのような近代への後戻りできない驀進こそ張赫宙文学の大きな特徴と言える。この点、「仁王洞時代」は張赫宙文学の本質を貫くまさに彼の代表作といえる。一方、仁王洞を後にした「私」は町の世界でさまざまな近代的な体験をしていくことになるが、それらのことは「仁王洞時代」以降にさらに続く。

4　「仁王洞時代」以降と近代の明暗

「仁王洞時代」の続編になっている『孤独なる魂』は、「私」が仁王洞を逃げ出した後、近代的な空間である町での新しい生活が描かれている。そして、その町でのおもな経験が学校入学と恋愛結婚の問題として取り上げられている。

まず、町での生活で最初に直面するのが小学校の入学の問題である。母と一緒に仁王洞から町に出た「私」は、母によって翌日から町のはずれの書堂（寺小屋）に入れられるが、「私」にはその書堂がいやでいやで堪らない。書堂では論語や小学、通鑑などの旧式の教育を従来のまま踏襲していたのである。汚い小さな部屋に子供を集めて、恐ろしく気難しい老人の教師はやたらに子供を鞭で打ち、従業料のことばかり気にしていたのである。「私」はそのような旧式の教育と書堂の汚い雰囲気が「死ぬほどいや」でよく欠席をする。その時、「私」の目にとまったのが学校の存在である。

私はそのうち町の学校があることを知つた。私は学校とはどんなところだらうかと、ひどく興味をもつて書堂へ行くあしで、学校へ行つた。そして校門の前で、生徒達の遊び戯れてゐる元気な姿を眺めてゐた。生徒が列をつくつて、規律正しい体操するのを見るのが好きだつた。私はそれが終るまで、運動場の片隅に坐つて羨ましさうに眺めてゐるのだ。

「私」は町の中心にある学校に強い興味をそそられて、書堂をさぼって学校のほうに行く。書堂は旧い封建時代の教育機関で、その教育内容は汚い部屋に集ま

り論語や孟子、通鑑などを丸暗記するだけのものであったが、学校は日本によって敷かれた新しいシステムの教育機関である。仁王堂を逃げだした「私」が近代的なシステムである学校に興味を示すというのは、自然ななりゆきといえる。そして、その学校教育のなかもでとくに「私」の興味を引いたのが「規律正しい体操」であったという。「規律正しい体操」は近代国民国家を支える新しい身体をつくることを目的にした、近代において極めて重要な役割を果たした分野である。そして、それはまた当時の教育のなかでもとくに強調された部分である。張赫宙自身の伝記と重なるこの作品の時代背景は、第一次朝鮮教育令が敷かれたまもなくの時期である。第一次朝鮮教育令は合併翌年の一九一一年に発布されたが、その第八条の普通学校の教育目的を記したところには、

第八条　普通学校ハ児童ニ国民教育ノ基礎タル普通教育ヲ為ス所ニシテ身体ノ発達ニ留意シ国語ヲ教ヘ徳育ヲ施シ国民タルノ性格ヲ養成シ其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授ク(一〇)

というように、「身体ノ発達」がなによりも強調されている。その「身体ノ発達」をはかるため、「規律正しい体操」が盛んに奨励されたが、それが「私」の興味を引いたのである。とにかく、「私」はそのような学校が好きで、書堂をさぼってほとんど毎日学校に遊びに行き、学校の生徒ともなじむことになる。学校の生徒達はそのような「私」を見て、

「お前、もう書堂なんか行く時期ぢやないぞ。これからは新しい学問をやらないと、後れてしまふよ」
「書堂なんてふるくさいぞ」

と書堂を辞めて学校に通うことを勧められる。それに全く同感していた「私」は母に学校に行きたいと言い出すが、頭から反対されてしまう。

「学校へゆきたい？馬鹿を言ふではないよ。お前の我がままにはほんとに呆れてしまふね。学校といふところはね、礼儀や学問をするところではないんだよ。あそこはね、兵隊をつくるところだよ」

毎日「規律正しい体操」ばかりやっている学校が、母の目には「兵隊をつくるところ」のように映るのは、ある意味では極めて当然のことかも知れない。近代学校教育はその延長線にある徴兵制と切り放しては考えられないからである(一一)。

封建的な因習を強く引きずっている母の目にはその本質の一面が自然に見えたのであろう。取りあえず、学校に行きたいという「私」の最初の欲望は母によって強く反対されたが、その欲望はますます膨れ上がり、「教室ではどんなことを教はるのだらうかと、まるで神秘なもののやうに」思われたりする。それで書堂はますます嫌いになり、書堂に行く足は自然に学校に向いてしまう。そのことで母からは散々な目に会うが、学校に行きたい欲望は募るばかりで、「私」はついに自分一人で入学許可を得るために学校の事務所を訪ねるまでに至る。しかし、親の許可がなければ入学できないことを知らされた「私」は、また書堂に戻らざるを得なかったが、ちょうどその時、憲兵をやっている知り合いのお兄さんが訪ねてきてさっそく彼にお願いして入学させてもらう。憲兵という彼の身分が母を納得させ、またややこしい入学手続きも簡単に済ませたのである。以前、仁王洞時代にもその封建社会を終わらせ、結果的に「私」を近代文明の都会に向かわせたのが憲兵であったが、封建教育から近代教育に導いたのもまたもや憲兵の力である。そのことから憲兵という存在は近代文明に向かう「私」に極めて重要な役割をしているといえる。取りあえず、憲兵のお兄さんの力で入学できた「私」はすぐ学校になじみ、新しい学問に強い興味を示して取りかかる。

私達の学習は国語の習得が主であつて、算術とか手習ひとかはあまり念を入れないやうだつた。私は国語の単語を段々と多くおぼえるにつれて、早く先生のやうに喋つてみたくてならなかつた。学習は書堂とは違つて凡てが規律正しくなされた。それは大へん私の気に入つた。

学習の中心になっている国語というのは日本語のことである。「私」はこの日本語を仁王洞時代を崩壊させた日本の憲兵から初めて聞いているが、学校に入学した「私」が情熱をそそいだのもこの日本語である。第一次朝鮮教育令によって以前の国語と国民は朝鮮語と朝鮮人という意味から、それぞれ日本語と日本国民を指す言葉になっていたのである。そして、引用文からもわかるように、普通学校の教育ではとくにこの国語の教育が重視された。その模様を当時の普通学校規則第七条の三から見ると、

第七条　三　国語ハ国民精神ノ宿ル所ニシテ且知識、技能ヲ得シムルニ欠クヘカラサルモノナレハ何レノ教科目ニ付テモ国語ノ使用ヲ正確ニシ其ノ応用ヲ自在ナラシメムコトヲ期スヘシ(12)

というように、国語は「国民精神ノ宿ル所」とされ、すべての教科目で国語の正

確な使用が重視されたのである。保護政治時代には、「処世に資する」ためであった日本語が「国民精神ノ宿ル所」と大きく格上げされ(13)、その地位にいた以前の朝鮮語は漢文と併せて「日常ノ応対ヲ為シ用務ヲ弁スルノ能ヲ得シメ」る言葉として規定されたのである(14)。作品の「私」はこのような教育情勢のなかで日本語に直面し、それを情熱をもって習得していくことになるが、この「私」の日本語に対する情熱は、この作品の自伝的な性格から張赫宙自身の経験であろう。そして、この日本語への傾倒という問題が張赫宙文学の評価を決定づける大きな基準になっている。張赫宙文学が持つ前近代への嫌悪と近代性への方向は彼の成長環境から大きく起因していることはすでに説明したが、そのもう一つの大きな要因が日本語の問題である。作品での「私」が学校で日本語に興味をもって勉強していく場面は、日本語への傾倒を示す張赫宙文学の親日の芽生えのようなものではなく、そこには日本による近代教育形成過程と朝鮮語の形成過程の問題も大きく介在しているのである。最初「私」が日本語を聞いたのが日本の憲兵からであるが、その憲兵から「私」は強い近代文明の臭いを感じているのである。また、その日本語は学校という近代教育のシステムのなかで教えられる言葉だったのである。つまり、「私」が入学を願望した学校の言葉であった。その代わり、「私」がなによりも嫌いだった書堂では未だに漢文を教えていたのである。となると、「私」は仁王洞や書堂という前近代的な漢文の世界から近代的な学校教育の日本語の世界に移ってきたことになる。日本語への移動はそれが支配者の言葉だという政治的な認識によるものではなく、その言葉が持つ近代性の所以である。前近代的な言葉と近代的な言葉のなかから、「私」は躊躇なく近代的な言葉を選択したことになる。その近代的な言葉が「憲兵」や「学校」という言葉で表される日本語だったのである。この問題は日本語で創作をした張赫宙文学全体についても言えると思われる。張赫宙文学を論じるにあたって、母国語である朝鮮語を捨て、「敵」の言葉である日本語で書いたという事実が張赫宙文学の親日・国策を証明する証拠のようによく取り上げられているが、張赫宙文学においての日本語は必ずしもそのような意味を持つ言葉ではない。張赫宙の日本語への傾倒は、作品での「私」のように、近代的な言葉の獲得という意味がより大きいと思われる。とすれば、母国語としての朝鮮語の問題が残るかと思われるが、それをよく示しているのが、作品中の「私」の言葉の移動過程である。「私」は書堂の漢文から学校の日本語に直接移動していて、朝鮮語の存在の陰は非常に薄いのである。これは特別に作品の「私」だけに限る問題ではなく、近代朝鮮語の形成過程と教育の問題と密接に関係すると思われるが、少なくとも「私」の時点（これを張赫宙の言葉の形成時期と言ってもいい）では朝鮮語は近代語として役割ができる状態ではなかったことは言えるであろう。「私」が学校で教わる国語としての日本語と

いうのは、日本という近代国民国家の言葉であり、また日本近代文学を盛る器としてすでに形成された近代的な言葉である。それに比べて朝鮮語というのは、近代国民国家（朝鮮は植民地である）の言葉でもなく、「私」の時点ではまだ形成されてない近代朝鮮文学（韓国の近代文学の出発は一九一七年李光洙の「無情」を始めとする）を盛る器でもなかったのである。勿論、それ以降、近代文学と同じように、朝鮮語は日本語を合わせ鏡にして近代語として形成されていくが、少なくとも「私」の時点では朝鮮語は日本語に比べると前近代的な言葉であったことは否めない。勿論、だからといって、日本語で書くのが当たり前のように正当化されることではないが、少なくとも張赫宙にとって日本語を選択したのは、作品での「私」が日本語に興味を持っていくことと同じように、その言葉の持つ近代性からであろう。そして、言葉の近代性というのが、さらに張赫宙文学を近代の方向に向かわせたと思われる。というのは、近代的な内容はより近代的な言葉によってのみうまく表現されるからである。

さて、本論にもどってその続きを見ると、小学校に入学した「私」は二学期の学芸会には代表に選ばれて皆の前で演説するが、その時は、「永い間暗黒にとざされてゐた我が朝鮮半島にも文明の光りは、潮の如く押しよせて既に十余年・・・・・」というような演説をし、周りの日本人から評判になる。「私」の近代への方向がより明確に示されているところといえる。その近代への方向をたどるかのように、「私」は商業学校に入り銀行員や店員として商業資本主義の道を踏むことになる。

一方、仁王洞を出てから町で経験するもう一つの大きな問題が自由恋愛である。釜山に遊びにきた従兄弟の仁栄が「新しい女性」よりも「旧い格式のある家柄の娘」と結婚すると言い出すが、その時「私」は、

「家だとか、家柄だなんて、きみも案外ふるいね。僕は家も家柄も何も僕の頭の中にはないよ。」

と言って旧式の結婚に反対する。朝鮮の旧式の結婚というのは、本人の意志とは関係なく、家柄同士で決める早婚のことである。「私」はこういう旧式の結婚を嫌悪し、いわゆる新女性と恋愛による結婚を夢みて、後には看護婦と自由恋愛を経験し、また新しいかたちの結婚をする。このような恋愛結婚の問題は「愛怨の園」や「人間の絆」「美しき抑制」「緑の北国」などの三部作にも執拗に繰り返されている。「愛怨の園」では母の強要で早婚した「私」が、ほかの女性と恋愛にふけり、妻との離縁のことをめぐる母子間の葛藤がおもに描かれている。また、「人間の絆」三部作はその全体が早婚の話に費やされていると言っていい。作家

の分身でもある浩吉と晶影の二人はそれぞれ母たちの強要によって早婚したことに悩むが、浩吉は母の反対を押し切って新女性と恋愛結婚に至る。一方、晶影は家族のことを考えて離縁に至らずに悩み続けていたが、三部作の終わりである「緑の北国」になるとついに決心して同僚の女教師と満州に出奔してしまう。張赫宙自身はこの三部作を指して、「長編「人間の絆」は実にながい間、私につきまとって離れなかった一つの生命の記録です」といっているが(15)、その中心的なテーマが早婚の弊害と恋愛結婚の問題である。旧式の結婚を強要する母と新しい新女性との恋愛結婚を夢みる「私」という旧と新が強く対立し、「私」は最終的に離縁と恋愛結婚のほうに走ってしまうという構成である。これは親の強要で早婚して離縁と恋愛結婚にいたった張赫宙自身の経歴と重ね合わせたものでもあるが、そのような主題の設定は張赫宙自身や張赫宙文学の持つ近代への方向を指し示すものであろう。

5　むすび

以上、「仁王洞時代」とそれ以降の「孤独なる魂」から見るように、張赫宙文学はその形成の時期から近代への方向性を内在し、以後その方向に突っ走ったような感がある。しかし、そこには朝鮮の近代が持つ根本的な問題として、あるいは日本による植民地の構造のなかでさまざまな問題点を抱えることになる。その最も重大な問題が戦争協力のことである。いわば国策・親日の問題である。近代への方向が日本的なものに収斂してしまうという近代朝鮮の本質的な一面によって、彼の目指す近代への方向が自ずから日本的なものに傾斜し、その日本への傾斜が植民地構造と戦争体制のなかで国策の性格を帯びたのである。そのためか、張赫宙像は未だに「親日文学者」「民族の裏切り者」「日本帝国臣民の申し子」などという忌々しい言葉で記憶され、彼の文学も日韓の文学史からほとんど抹殺されている状況である。戦前には朝鮮を代表する小説家として日本で高く評価された張赫宙文学が、戦後には日韓文学の狭間のなかで、なにか触ってはいけない「腫れ物」のような扱いをされてきたのである。しかし、先行論も指摘しているように(16)、張赫宙文学において満州開拓小説の場合、それはやたらに時局に迎合するようなものではなく、また彼の国策的な言説にしてもそれは決して他の朝鮮の作家に比べて激しいものでもない。たとえば、国策文学として槍玉に挙げられる「岩本志願兵」や「出発」にしろ、同じく日本で活躍して、戦後の日本ではほとんど英雄化されている金史良の「海への歌」などと比べると、その国策の迎合の度合いは極めて少ないのである。にも関わらず、その極端な評価の分かれ道には、彼が目指した近代への問題が大きな影を落としているように思われる。平

壌富豪出身の東京留学生で、酒に酔うといつも両班の出自を自慢する金史良、または朝鮮近代文学を担うことになる東京留学帰りの両班子弟たちのような、出自から前近代の特権に懐かしい郷愁を感じ、またそれがいざという場合には旨い具合に日帝への抵抗にもなりうる精神土壌を彼は最初から持ち合わせていなかったのである。彼は朝鮮近代文学には珍しく精神的にも実際においても封建朝鮮の庶子として生まれ、伝統や民族という美名に隠されている前近代層には見向きもしなかったのである。そのような張赫宙文学の出自が、東京留学帰りの両班出身やその伝統を継ぐ戦後の新たな思想と政治イデオロギーによって、彼を日本産の白粉を塗り付けた朝鮮カラスのように映らせた可能性は容易に想像できる。

従来の張赫宙論をめぐる政治イデオロギーによる評価は、その思想性故に、張赫宙文学の本質の大きな部分を見誤ってきたといえる。政治イデオロギーの陰に隠され、その前提になる張赫宙文学の近代への方向という側面が全く無視されてきたのである。張赫宙が目指した近代というものが、ただ日帝に利用される時代を見誤った「幻想」であったかどうか判断するのは難しい。しかし、少なくともそれが「幻想」であるとれば、「幻想」でない近代はあまり想像できず、それは単に、伝統と民族の名のもとで両班的な前近代への滑稽な郷愁をとことんまで繰り返すことであろう。それがどのようなものであるか雄弁に語っているのが「仁王洞時代」であろう。そして、なによりも、このような近代と反近代の矛盾のなかにこそ張赫宙文学の悲しい宿命があるように思われる。

注

（1）林鐘国『親日文学論』（大村益夫訳、高麗書林、一九七六年）は、親日に関わる作家たちの行動と言説だけを抜粋して列べたものであるが、その方法自体が個別作家に対する強烈な批判になり、作家評価の基準としても働いていた感を否めない。

（2）『長恨夢』は趙重桓によって「毎日新報」（一九一三年五月十三日から同年十月一日まで）に連載された。『長恨夢』と『金色夜叉』においての登場人物の関係については、鄭戊鍊・山野清二郎「韓国の新小説に及ぼした日本近代文学の些例」（『埼玉大学紀要』総合編十二巻、一九九〇年）に詳しい。

（3）高晶玉『朝鮮民謡研究』首善社、一九四九年

（4）金東里は戦前から朝鮮を代表する作家の一人として日本でもその作品が翻訳紹介され、戦後には韓国文壇を主導してきた作家である。その代表作「巫女図」は国定教科書にも掲載されており、後に「乙火」として書き継がれ、

日本でも紹介されている。その概要を簡単に紹介すると、巫女である毛火は娘のナンイと二人で暮らしていたが、ある日突然、長く消息を断っていた一人息子が篤実なキリスト教信者になって帰ってくる。父なし子であった息子は、今は平壌のアメリカ宣教師に可愛がられて、アメリカ留学を前にして巫女の母を訪ねてきたが、宗教の違いでお互いに衝突する。息子は巫女の母に迷信を辞めることを要求し、母は一人息子が西洋鬼神に憑かれているといって邪気払いしようとする。母子が決定的に対立し、母は息子についている西洋鬼神を取り払うため、密かにクッ（邪気払い）を強行し、聖書を燃やす狂気の中で息子を包丁で刺してしまう。それがもとで一人息子は死に、後に母の毛火もクッのさなかに自殺する設定である。

（5）兪鎮午は田中英光の『酔いどれ船』では「京城大学きつての秀才」として紹介されている朝鮮を代表する評論家であり、朝鮮での張赫宙の唯一の理解者でもあった。その代表作「滄浪亭記」は、申建訳『朝鮮代表小説集』（一九四〇年二月、教材社）のなかで日本に翻訳紹介されたもので、その内容は主人公の＜私＞が幼年期に古色蒼然たる朝鮮風の屋敷である滄浪亭で遊んだ叙情的な記憶と郷愁が包まれた作品である。その梗概を紹介する。

滄浪亭の主人は＜私＞一門の曾祖父にあたる西江大臣で、彼は大院君の時世に吏曹判書（今の大臣）を歴任しながら鎖国に携わったが、その夢が果たせず、政治から引退してこの屋敷で憂鬱な末年を送っていたのである。そこを幼い＜私＞が訪れ、一門の旧時代の華やかな時代の名残に浸りながら、滄浪亭の奴婢出の乙順と親しくなる。日頃大人の目を盗んで遊びふけていた二人は砂浜で昔風の長い剣を発見する。未だに光彩を失っていないその剣は、以前この地に住んでいた鄭大将のものと思われ、それを手に取った西江大臣は昔日の鎖国を思い出に非常に感激する。その後、二十年余り経って西江大臣やその婦人も死に、滄浪亭は跡形もなくなり、近代教育を受けていないその子孫は没落する。そうしたある日、成人した＜私＞は滄浪亭を三回も夢見、幼年期以来の滄浪亭の跡を訪ねてみることにするが、そこには近代的な工場が立って煙を出し、江岸では最新型の旅客機が轟音を轟かせていたという内容である。

（6）「南谷先生」は『国民文学』（一九四二年一月）に掲載された兪鎮午の日本語小説である。田中英光は「朝鮮の作家」（『新潮』、一九四二年二月）の中で、兪鎮午の作品について、「兪鎮午さんも古いものでは、「滄浪亭記」、これは京城の詩人則武三雄の言によると、ツルゲネエフの「初恋」以上の作品と云ふ事だが、いかにも東洋風な、南画に稀に感じるやうな強く甘い哀愁のある作品で、ぼくも好きだ。他に古いものでは「秋」近作では「南谷先生」

が好いものだと思ふ。「南谷先生」は国語で書いてあるが、下手な内地作家、ぼくなぞより遥かに使ひ方がうまい。」などと高く評価している。その概要を紹介する。

南谷先生は朝鮮の古風な礼儀と伝統を頑なに守る潔癖で狷介な性格の漢方医である。医者の免許もないが、その処方は不思議にもよく効き、京城でもずいぶん評判になっている。そこを主人公＜秀東＞の娘が病気にかかり、南谷先生に診てもらうまでの経緯が作品のおもな筋になっているが、先生の腕はまことに奇異なもので、父の存命中には、妹の狼紅熱が悪化して父のお使いで先生を訪ねた時には、妹の「病状について二言三言質問」し、「患者を診もしないで」処方をくれたが、それで妹が回復に向かったことがある。また、母親が脳溢血で倒れた時には、男女の別という古いしきたりから直接肌に触らないようにタオルをかぶせて脈を計りながら、母の死を正確に当てて、その翌日にいきなり葬儀の服装で来て主人公を驚かせたこともある。しかし、その後、あまりにも煩瑣な礼儀に主人公は堪えられなくなり、先生との関係もいつの間にか疎くなる。ちょうどその時、娘が肺炎にかかり大学病院に入院させたが、熱がますます酷くなり、医者からチフスかも知れないという診断を受ける。それで最後の頼みで南谷先生を訪ね、古いしきたりで以前の無礼を侘び、処方を頼んだのである。すると、南谷先生は大学病院のチフスという診断に軽蔑し、「洋医というものは馬鹿な奴じゃ」「注射は人を殺すものじゃ」と罵りながら、悪い体調の中で無理をして処方してくれる。その後、娘の病気がチフスでないことが判明し、「南谷先生の処方が不思議な効力を発揮したのか、病院での注意深い手当が効を奏したのか」娘の熱が奇跡のように退いたのである。そして、後日主人公が南谷先生にお礼の挨拶に行った時には、先生は無理が祟って亡くなっていたという話である。

（7）『仁王洞時代』の序文、「作者の言葉」からの引用。

（8）張赫宙「私の小説勉強」（『文芸』、一九三九年十一月）

（9）平岡敏夫『日本近代文学の出発』（塙書房、一九九二年）の中では、山路愛山の「精神的な革命は時代の陰より出づ」という言葉を引用しながら、日本近代文学の出発を時代の陰であった佐幕派の子弟の文学と関連づけて論じている。

（10）教育史編纂会『明治以降教育制度発達史』第十巻、教育資料調査会、一九六四年（重版）。

（11）三浦雅士『身体の零度ー　何が近代を成立させたか』（講談社、一九九四年）では、近代軍隊の形成のなかで、舞踊にかわって現れたのが体育と体操だと指摘している。

（１２）注（１０）に同じ。

（１３）光武十年（一九〇六）八月の勅令第四四号「普通学校令施行規則」第九条三による。その全文は、「三　日語は平易の日語を了解し且つ使用する能力を得せしめ、処世に資するを以つて要旨とする。日語は発音および簡易の会話より始め、進んでは簡易なる口語文の読法、書法、綴方を教授すべし」。大韓民国国会図書館編『韓末近代法令資料集五』（一九七〇年）参照。

（１４）注（１０）と同じ。その本文は、「朝鮮語及漢文ハ普通ノ言語、文章ヲ理会シ日常ノ応対ヲ為シ用務ヲ弁スルノ能ヲ得シメ兼テ徳性ノ涵養ニ資スルコトヲ要旨トス」とある

（１５）張赫宙「人間の絆」（『知性』四巻四号、一九四一年四月）

（１６）白川豊は「張赫宙の日本語小説考（一九三〇―一九四五）」（『史淵』一二四号、九州大学、一九八七年）の中で、張赫宙の満州開拓物の作品をいちおうは「時局・国策的作品」として分類しているが、満州開拓物は「意外にも（？）」「顕著に迎合的な作品」ではないことを指摘している。なお、張赫宙研究においては、近年同氏によってはじめて総合的な研究が本格的に始められ、「張赫宙研究」（博士学位論文、東国大学校大学院、一九八九年）、「張赫宙研究」（『植民地期朝鮮の作家と日本』所収、大学教育出版、一九九五年）などという緻密な文献学的な整理がすでになされている。本稿もこれによるところが多かった。